

九州天皇家論 3章 神武東征

九州天皇家の誕生 東征のロードマップ

第一次東征・・・日向・高千穂宮から阿岐國の宮への巡幸

古事記と日本書紀では第一次東征路は少し異なる。日本書紀は海路である。だが、古事記は海路か陸路か明確ではない。特に船を使ったという記事はないので、ここでは陸路とする。記紀とも出発は「日向」である。筑紫の岡田宮に居たことも共通する。そして、一次東征の最後の土地は、記紀とも、阿岐國(安藝國)である。

<古事記が示す東征ルート>

第一次陸路: 日向－豊国・宇佐－筑紫岡田宮(1年)－阿岐國多祁理宮(7年)

<日本書紀が示す東征ルート>

第一次海路: 日向國－速吸之門(曲浦)－筑紫・菟狭－筑紫・岡水門－安藝國



神武が住んでいた宮の名前は「日向の高千穂宮」である。「高千穂」とは天孫、瓊瓊杵尊が降臨した山の名前で、この山は小倉南区・足立山である。神武は瓊瓊杵尊の後継者として、小倉北区の高千穂宮にいた。神武は、自ら、小倉北区を「西の偏」と云ってるように、この地は、「西」という意味の、「日向」とも呼ばれていた。

日本書紀は、神武が出発した國を「日向國」と記録している。古事記も、「日向」から出発したと記録している。記紀とも、神武の出発地は「日向」である。この「日向」とは、九州天皇家の「日向」、つまり小倉北区である。神武は小倉北区の「高千穂の宮」から第一次東征に出発した。この「日向」を宮崎県と比定したのは後世のまちがいである。

神武は、「日向・高千穂宮」から、「豊國(門司)」へ進み、「筑紫岡田宮(門司)」に一年滞在した。さらに、「阿岐國(門司大積)」へと進み、この國の宮に七年間滞在した。門司大積には「天疫神社」がある。恐らく、神武がいた「多祁理宮」とはこの宮であろう。

この行程は軍事目的ではない。この間には一度の軍事衝突も記録されていない。目的は政治にあった。神武の言葉に表れているように、「天(あめ)の下」の統治を目的とした政治的東征であった。

第二次東征 妻の里、「吉備」が軍事的東征の出発地

＜古事記が示す第二次東征ルート＞

第二次海路：吉備高島宮(8年)－速吸門－浪速の渡り－青雲白肩津(会戦)－南方－血沼の海－紀國男之水門(五瀬命没)－熊野村－吉野川河尻－宇陀穿－宇陀－忍坂大室－畝火の白檮原宮

＜日本書紀が示す第二次東征ルート＞

第二次海路：吉備國(3年)－難波崎・浪速國－河内國・草香邑・青雲白肩津－孔舎衛坂会戦－草香津(盾津)－茅渟の山城水門－名草邑－熊野・神邑－熊野・荒坂津－菟田・穿邑－吉野－畝傍山

神武は、「多祁理宮」に滞在した後、「吉備」に向かっている。この「吉備」は岡山吉備ではない。九州天皇家の「吉備」、つまり、彦島西山町である。では、何故、神武は彦島「吉備」に向かったのか。その理由は軍事的侵略の準備をするためだった。神武は「阿岐(安藝)國」に滞在している間に「東征」を決意した。その目的地は「阿岐(安藝)」の西南に位置する國である。東征には兵が要る。兵を運ぶ船が要る。むろん、兵器も食糧も要る。これらを用意しなければならない。だが、今の神武には兵はいない。また軍用船がない。軍用船を造る技術もない。船を造ることができるのは海部一族である。幸運にも、神武の最初の妻は「阿多の小櫓の君」の娘だった。「阿多」は直角を意味し、直角とは直角に曲がる彦島小戸を示す言葉である。神武の妻の里は彦島にあった。そこには海部一族がいた。彼らは船を造ることができた。こうして、神武は「阿岐(安藝)國」から、彦島の「吉備」に渡ったのである。

神武は「吉備」で徴兵し、「吉備」で造船して、今度は、軍事目的で東征に出発した。神武の妻の実家の援助がそれを可能にした。これが第二次東征である。神武の行程は二つに分かれている。一度目は政治目的、二度目は軍事目的である。これは記紀ともに変わらない。ただ、一次東征の古事記の行程は陸路であるが、日本書紀の行路は海路である。どちらの場合も、「吉備」で造船している。吉備は神武の妻の里であった。妻の里には海部集団が存在した。彼らが造船したのである。神武はここで造船して、海部の久米一族を引き連れて、軍事的東征に出立した。彦島の「吉備」が軍事的東征の出発地であった。

吉備(彦島西山町)－速吸門(彦島小戸)

古事記では、「吉備」を出てすぐ、「速吸門」、を通過している。「吉備」とは彦島で、「速吸門」は彦島・小戸の出入り口である。日本書紀では、「日向」から出立して、すぐ、「速吸之門」を通過している。通常、「速吸之門」は豊後水道と比定されるが、この比定はまちがいである。出発地の「日向」を宮崎県・日向と誤読した結果である。

日本書紀は、「速吸之門」を「曲浦」と云うと記録している。「曲浦」とは彦島・小戸の異称である。まさに、直角

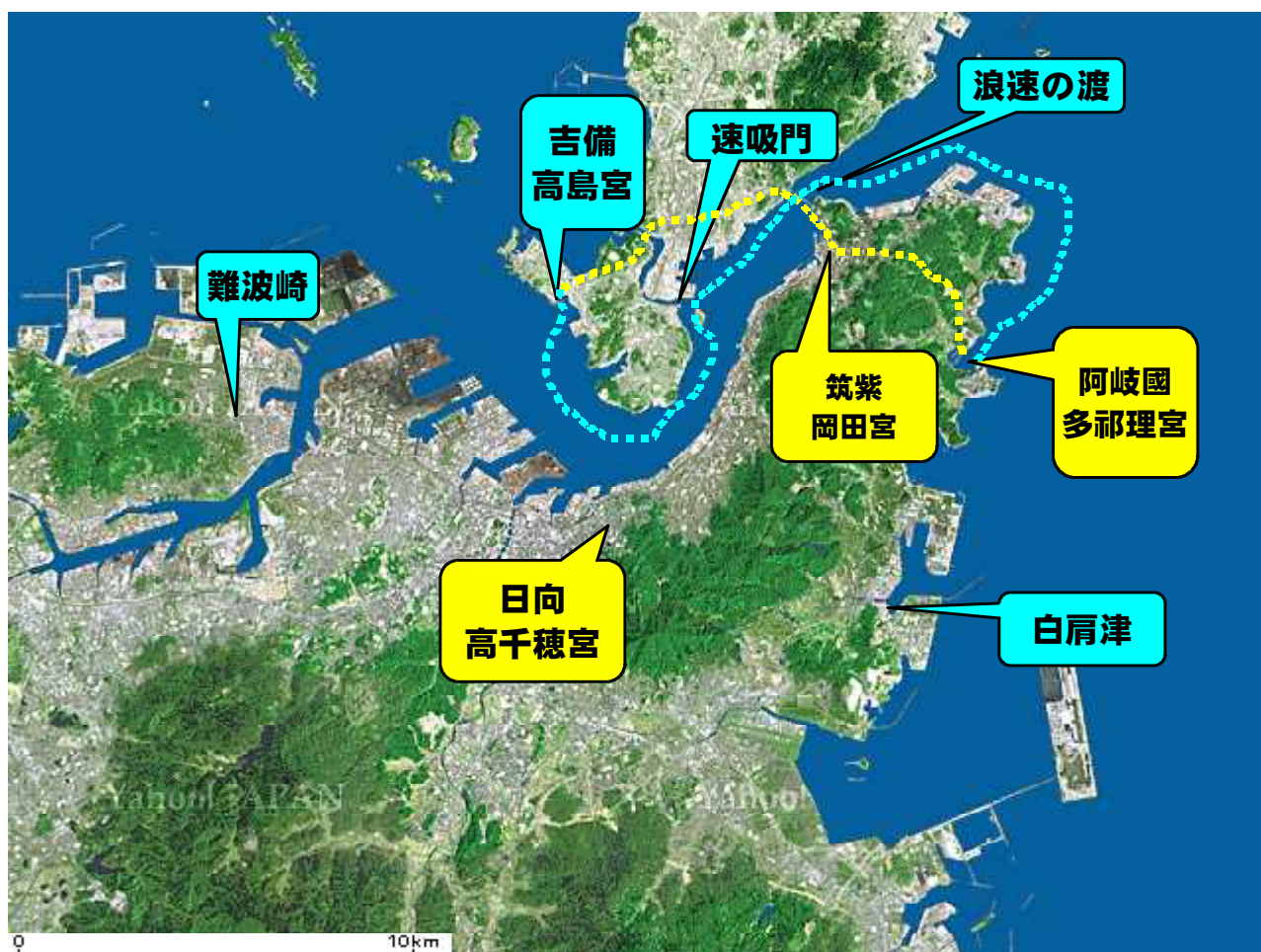
に曲がる。古事記・日本書紀共に、「速吸門」とは彦島小戸である。神武は、「吉備(彦島・西山)」を出て「速吸之門(彦島・小戸)」を通過していったのである。

「速吸門」は、神武東征のロードマップを作成する上で、一つの定点である。この定点から、「吉備」あるいは「日向」を定めるべきである。

浪速の渡(壇ノ浦)－白肩津(門司区恒美)

第二次東征は海路だった。彦島から船で東にむかった時、水先案内を依頼したのは彦島・小戸の主、「珍彦」であった。彼は彦島・小戸の出入り口、「速吸門」で、漁業を営みとしていた海峡の統治者だった。

関門海峡は古来、浪が速く、東流、西流する「浪速」で、案内人を必要としたのである。第二次東征に出発した神武一行は、舟で東に進み、「浪速の渡り(壇ノ浦の渡り)」を通り、企救半島の北端を廻り、かつて滞在した「阿岐國」まで進軍し、そこから周防灘を南下した。



白肩津(門司区恒見)

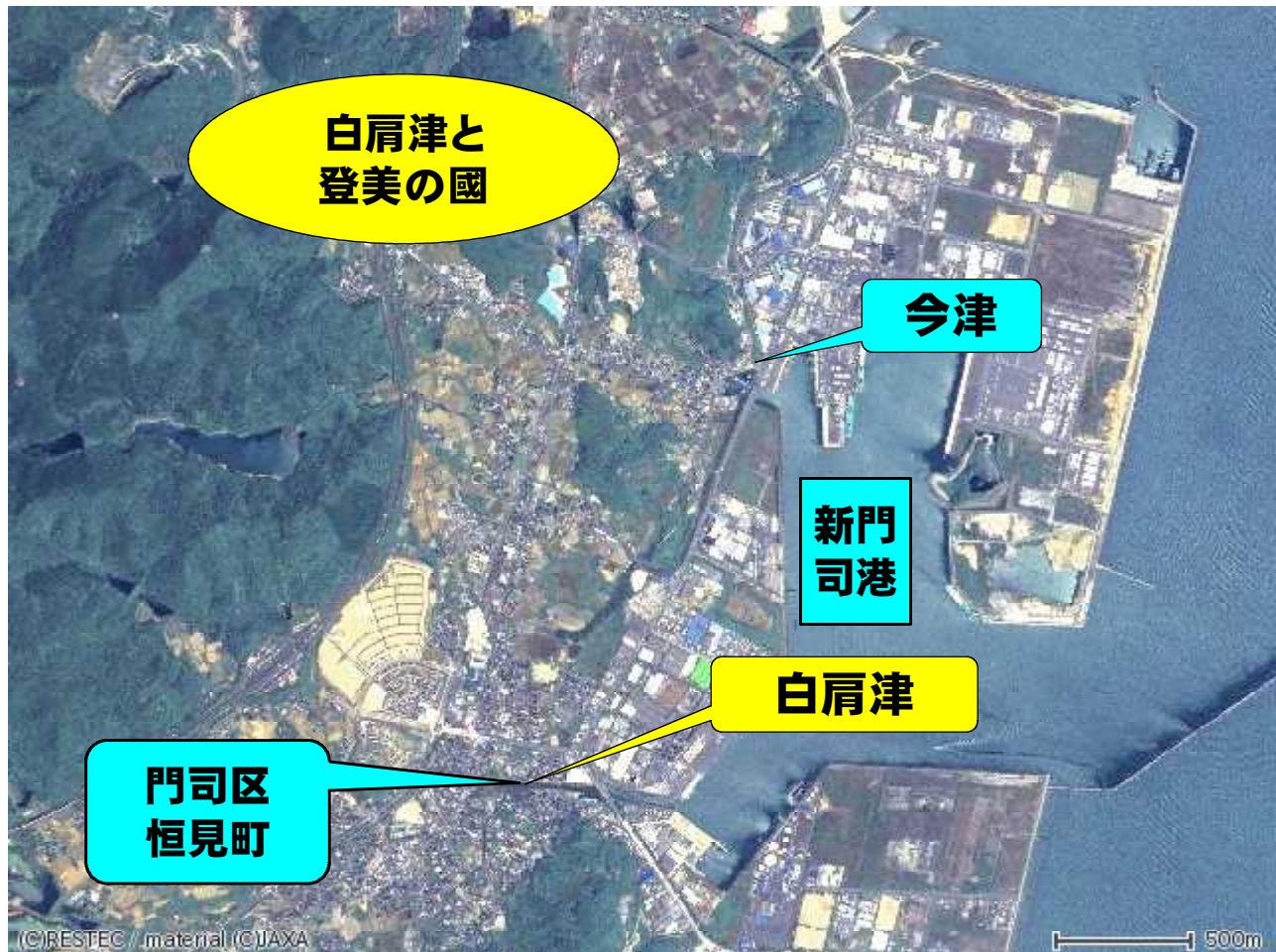
「白肩津」は「阿岐國」の南に存在する川の湊である。神武一行は「白肩津」に上陸しようとした瞬間、急襲された。兄が矢を受け、神武軍は上ってきた川を下り、「南方(みなみのかた)」の海に逃げた。

「日を背負って戦え」といった兄、五瀬命の言葉から、神武が遡った川は、東西に流れる川であったことが判明する。また、この川は神武軍の手こぎの舟がさかのぼることができる川である。川は急流ではない。人力で遡ることができる川とは、緩やかな流れの川である。穏やかな川でなければ、舟でさかのぼれるものではない。東西に流れる川とは門司区恒見の櫛毛川である。この川の近くが良港だったことは、新門司港が証明している。

大阪からのフェリーの多くはこの港に着く。また、「今津」という地名が残る。古来、良港で栄えた土地で、人も富も集中していたと思われる。

神武が奪おうと挑み、「登美能那賀須泥毘古、軍を興して待ち向へて戦ひき」と、那賀須泥毘古が奪われまいと、逆襲したのも当然といえる、豊かな国だったのであろう。白肩津とは門司区恒見町である。

以上が、「白肩津」までの神武東征ロードマップである。



熊野村

神武をさらに追いかけて。『登美の國』の一戦で敗れた神武は転戦する。

南方―血沼の海―紀國・男之水門(五瀬命没)―熊野村―吉野川河尻

神武一行は南の海に逃れ、五瀬命がこの海で手を洗った。故、その海を、「血沼海(ちぬの海)」と名前をつける。その後、「紀國」の「男之水門」まで来て、五瀬命が亡くなり。『紀國』の「竈山」に葬って、次に着いたのが、「熊野村」であった。

熊野の山は麓ヶ築山

「白肩津」の緒戦に敗退した神武一行は、五瀬命が、「今者(いま)より行き廻りて、背(そびら)に日を負ひて撃たむ」と云った通り、南下して、敵の背後に回り、太陽を背負って戦おうとした。「今から敵の西側に出て太陽を背に受けて逆襲しよう。」という作戦から考えると、「熊襲村」は「白肩津(門司恒美町)」の西に位置したことになる。

「熊野村」へ進むために、門司区の「井の浦港(新門司臨海工業地帯の南の小さな港)」に再度上陸したと考えられる。その入り江から北に進み、敵の西側に出て、背後から襲うという作戦であった。

「白肩津(恒見町)」から「井の浦港」までは3～4kmである。神武東征・奈良設定では、大阪・盾津で破れた神武軍は泉南の海を南下し、和歌山市を過ぎ、有田を過ぎ、御坊を過ぎ、白浜を過ぎ、串本を過ぎ、新宮を過

ぎ、熊野まで迂回したという設定となっている。いくら迂回するといっても、これでは非現実である。こんな莫迦げた作戦はない。神武が敵の西側に出て、太陽を背負って戦おうとして再上陸した「熊野村」は、井の浦港から北上した門司区・恒見町であろう。「白肩津」の南西に当たる。

「其の熊野の山の荒ぶる神」という山は「鶯ヶ巢山」であろう。「熊野」で神武一行は散々な目に会う。「大きな熊」が現れる。次には、神武を初めとして、兵も皆「遠延(おえて)伏しき」と、弱る。この危機に姿を見せたのが「高倉下」という人物であった。彼は太刀を持参した。その理由を尋ねると、次のように答える。

己が夢に、天照大神、高木神、二柱の神の命以ちて、建御雷神を召(よ)びて詔りたまひけらく、『葦原中國は伊多玖佐夜藝帝阿理那理(いたくさやぎてありなり)。我が御子不平(やくさ)み坐す良志(らし)。其の葦原中國は、専ら汝が言向(ことむ)けし國なり。故、汝建御雷神降るべし』とのりたまひき。爾に答へ曰ししく、『僕(あ)は降らずとも、専ら其の國を平(ことむ)けし横刀有れば、是の刀降すべし。此の刀を降さむ状(さま)は、高倉下が倉の頂(むね)を穿ちて、其れより墮し入れむ。故、阿佐米余玖(あさめよく)汝(なれ)取り持ちて、天つ神の御子に献れ』とまをしまひき。故、夢の教えの如に、且(あ)したに己が倉を見れば、信(まこと)に横刀有りき。故、是の横刀を以ちて献りしにこそ』とまをしき。

(古事記・神武東征)

天照大神、高木神は「天(あま)」の神である。建御雷神は「天孫降臨」の際、出雲國の王に國譲りを迫まった武神である。この神は、「天國(彦島)」から古代出雲國へ降った。古代出雲國とは小倉南区である。因幡の白兔の民話は小倉南区の稲葉で生まれた。今、神武が危機に瀕している「熊襲」の村は建御雷神が降った古代出雲の國のすぐ近くである。

神武は天孫ニニギが治めた王朝の王である。故に、「天つ神の御子」と言われた。神武を援助すべく、彦島の「天一族」が立ち上がったというのがこの説話の趣旨である。この神刀のお陰で、神武一行は危機を脱出することができた。さらに、高木神が神武に夢告する。

天つ神の御子を此れより奥つ方に莫(な)入り幸(い)でまさしめそ。荒ぶる神甚多(いとさは)なり。今、天より八咫鳥を遣はさむ。故、其の八咫鳥引道(みちびき)てなむ。その立たむ後より幸行(さいこう)でますべし』とまをしまひき。

この「荒ぶる神」とは「熊襲」である。この一帯を支配する一族が「熊襲」で、高木神は、この強力な力を持つ「荒ぶる神」とは戦うな、と神武に忠告したのである。山の中で方向を見失っていた神武はそれ以上深入りしないで、「八咫鳥」が飛んで行った方向に降り、戦いを避けた。この判断が賢明であった。もし、この時、正面衝突していれば、神武は生き残れなかったかもしれない。そして、神武東征物語も、その後の天皇家の歴史もなかった。この山中で方向を見失った神武一行は、「大鳥」が飛んでいった方向に降りていく。そして、「吉野河の河口」に出た。

吉野河は竹馬川

八咫鳥の飛んでいった方向に山を下ると、神武一行は、「吉野河の河尻」、つまり、河口に出た。河口というのであるから、そこは海の近くである。この行程は日本書紀にはない。この「河尻」も、古来、難問であった。東征を奈良と想定する場合、吉野川の川上に出ることはあっても、「河尻」、和歌山市の河口に出ることはない。地理上矛盾する。しかし、古事記は「河尻」と記録している。

神武一行は「熊襲村」を離れ、川に出た。そこは河口であった。その川とは竹馬川である。記紀の「吉野河」とは竹馬川をさす。「櫛毛川」に出た可能性もあるが、その場合は「櫛毛川」の上流となる。河口となるのは、竹馬川である。そうすると、「八咫鳥」は、「熊野」の山から竹馬川の方向に飛び去ったということになる。この時、すでに日暮れ間近だったのであろう。明かりひとつない山中で、不安な神武一行を救ったのは大鳥だった。そして運良く、河口に出ることができたのである。九州天皇家で、「吉野川」という名の川は、小倉南区を西から東に流れる竹馬川である。奈良、吉野川ではない。



「東の國」とは吉志(きし)

神武が遡った川は櫛毛川である。その川の流域は、「吉志(きし)」である。神武が軍事的に侵略しようとした「東の國」への入り口が「吉志(きし)」ということになる。恒見の港、「白肩津」は穏やかな港である。神武たちはこの港に上陸し、一気に、「東の國」を征服しようと図ったのであるが、予想外の反撃にあった。ここにも強力な国家が存在した。

この東の國、「吉志」の簡単な歴史を見ておこう。

吉志(きし)は、門司区の南東部に位置し、東は企救半島の山地で、北は畑(はた)、南東は恒見(つねみ)、南西は小倉南区の吉田に接します。かつて西は響灘でしたが、1962(昭37)年から埋立てられ、新門司と町名が付けられた臨海工業地帯が1972(昭和47)年に完工し、新門司港が築港されました。吉志は岸からで、海に接する場所から付けられたと思われます。鎌倉時代、下総親房(しもふさちかふさ)が門司関に下向して来て、門司城を居城とします。鎌倉末期頃より下総氏は門司氏と称し、一族は門司関六ヶ郷に分立します。門司六郷は、片野(現在の小倉北区三萩野付近)・柳(現在の門司区大里付近)・楠原(現在の門司港付近)・吉志・伊川・大積郷でした。

江戸時代から明治22年まで吉志村でした。下吉志には石灰石が埋蔵され、幕末には採掘が始まりました。1889(明治22)年猿喰・畑・今津・吉志・恒見・伊川の6ヶ村が合併して松ヶ江村ができ、旧村は大字になりました。1923(大正12)年、畑にあった松ヶ江村役場が吉志に新築移転されました。1942(昭和17)年、松ヶ江村は門司市に併合されました。6つの大字は門司市に引き継がれました。

homepage2.nifty.com/kitaqare/tenm08.htm -



宇陀の陣

神武一行は、「吉野河」から、「宇陀」へ進む。古事記は簡潔である。

「宇陀」の「兄宇迦斯」－「忍坂」の土雲「八十建」－「登美毘古」－「兄師木・弟師木」

日本書紀は丁寧に書いている。

「兄猾」(菟田)－「八十建」(国見丘)－「八十建の黨」(忍坂邑)－「兄磯城彦」(墨坂)－長髓彦－「新城戸畔」(層富縣)－居勢祝(和珥の坂下)－「猪祝」(臍見の長柄丘岬)－「土蜘蛛」(高尾張邑)

「吉野河(竹馬川)」の河口に出た神武一行が次に向かったのは「宇陀(菟田)」である。戦った相手は、古事記、日本書紀共に「宇迦斯の兄弟」である。「宇陀」とは地名であるが、どの辺りにあったのか。神武紀に「宇陀(菟田)」に関する記述がある。

是(「宇陀」の「兄猾(えうかし)」を倒した)の後に、天皇、吉野の地を省たまはむと欲(おもほ)して、乃ち菟田の穿邑より、親ら軽兵を率ひて、巡り幸す。

「吉野」とは竹馬川の河口である。「菟田(宇陀)」は「吉野(小倉南区吉田)」からそんなに離れていない。

宇陀(菟田)の國見の丘

「宇陀」には「國見の丘」という、神武が後年、この山から國見をしたことからその名が付けられた要害の山があった。この山が神武紀の登場する。

この丘には三つの道があり、「女坂(めさか)」、「男坂(をさか)」、「墨坂」と云う。「墨坂」には、「煉炭(おこしずみ)」を置いて、登ってくるができないように、防御を固めていた。この敵の堅陣を攻撃する際の作戦を、「速吸門」で案内人となった「珍彦」(名前が変わって「椎根津彦」)が献策する。その場面である。

今は先ず我が女軍を遣して、忍坂の道より出でむ。虜(あた)見て必ず鋭(ときつはもの)を盡(つく)して赴(い)かむ。吾は勁(つよ)き卒(いくさ)を駈馳(か)せて、直(ただ)に墨坂を指して、菟田川の水を取りて、其の炭の火の灌(そそ)きて、にはかの間に、其の不意に出でば、破れむこと必じ」とまうす。

- (1) 「菟田」には「国見丘」という攻防の要所である小高い丘がある。
- (2) その丘の近くには菟田川がある。
- (3) 「菟田」と「吉野(竹馬川河口)」は近い。
- (4) 「菟田」も吉野も小倉南区に存在する。

神武紀から、「菟田」について判断できるのは以上である。しかし、垂仁紀にも、また、「菟田」が登場する。

垂仁紀「菟田」は神武紀「菟田」と同じ

垂仁紀に「菟田」が登場する。

垂仁25年3月10日、天照大神を豊耜(とよすき)入姫命より離ちまつりて、倭姫命(やまとひめのみこと)に託(つ)けたまふ。ここに倭姫命、大神を鎮め坐(ま)させむ處を求めて、菟田の笹幡(ささはた)に詣る。更に還りて近江國に入りて、東(ひがしのかた)美濃を廻(めぐ)りて、伊勢の國に到る。時に、天照大神、倭姫命に教へて曰はく、「是の神風の伊勢國は、常世(とこよ)の浪の重浪(しきなみ)帰(よ)する國なり。傍國(かたくに)の可憐(うま)し國なり。是の國に居らむと欲(おも)ふ」とのたまふ。故、大神の教え随(まま)に、其の祠(やしろ)を伊勢國に立てたまふ。因りて齋宮(いはひのみや)を五十鈴の川上に興(た)つ。是を磯宮(いそのみや)と謂う。則ち天照大神の始めて天より降ります所なり

天照大神は、元々、どこにいたのか。「天(あま)」である。「天照大神の始めて天より降ります所なり」と、書くように、「天(あま)」に居た。「天(あま)」とは彦島である。天照大神は彦島に祀られていた。ここが天照大神の生誕の地であり、父から統治を委ねられた聖地だったからである。死後、そこに祀られていた。だが、垂仁25年に初めて、「天(彦島)」から他所に移った。それが「伊勢國」であるという。天照大神の行路は次の通りである。

「天」－「菟田・笹幡」－「近江國」－「東美濃」－「伊勢國」

- (1) 「天」とは彦島である。彦島に「天(高天原)」が存在した。垂仁25年、彦島に祀られていた天照大神は彦島を出て、他の場所に遷された。
- (2) その際、「菟田」に向かった。この「菟田」は神武紀の「菟田」と同じである。
- (3) 次に、「近江國」へ向かった。この「近江」も滋賀県近江ではない。九州天皇家の「近江國」である。古事記では、「淡海」「淡海國」と書かれている。九州天皇家の「近江」は「菟田」から近い。
- (4) 次に向かった「美濃」も岐阜県美濃ではない。九州天皇家の「美濃」である。九州天皇家の「美濃」も吉野からそんなに離れていない。
- (5) 「伊勢國」も九州天皇家の「伊勢國」である。現在の三重県伊勢ではない。

天照大神の遷宮の行路は、「更に還りて近江國に入りて、東(ひがしのかた)美濃を廻(めぐ)りて、伊勢の國に到る」と、ある如く、進路は東である。「近江國」に入って、進路を東に変えて「美濃」に進んでいる。そして「美濃」から「伊勢」に進んでいる。古事記・崇神記に「美濃」が登場する。

是を以ち驛使(はゆまづかひ)を四方に班(あか)ちて、意富多泥古(おほたねこ)と謂う人を求めたまひし時、河内の美努(みのの)村に其の人を見得て貢進(たてまつ)りき。

「河内の美努」という。「美努」とは「美濃」である。美濃は「河内」に存在した。だが、この「河内」は大阪の河内ではない。

天照大神遷宮説話に登場する「菟田」「近江」「河内」「美濃」は全て北九州に存在したの九州天皇家の地名である。天照大神は現代の「奈良(宇陀)」―「滋賀県(近江)」―「大阪(河内)」―「岐阜(美濃)」―「三重(伊勢)」という広域を移っていったのではない。出発地は「天(彦島)」である。彦島を出た天照大神が巡ったこれらの土地は全て北九州である。

九州天皇家「宇陀」は小倉南区長野

私たちは、神武軍を追跡して、「吉野河」へ来た。この吉野河は竹馬川である。神武が次に向かった「宇陀」はどこか。小倉南区の竹馬川の近くである。神武は竹馬川からどこへ向かっていったのか。神武が、最終、到着した土地は、「畝傍山」の麓である。「畝傍山」とは、万葉集の「高市岡本宮の天皇」や倭建によって、「天香具山」と詠われた山、香春町・香春岳である。

神武軍の行路は小倉南区―香春町である。「菟田」はこのコース上に存在する。この想定で大きく外れるということはない。神武の戦いの主戦場は小倉南区だった。その戦いは更に続く。

